太宰治における仮想現実と仮面的適応

Virtual Reality and Masked Adjustment in Osamu Dazai

齋　藤　　　繁
Shigeru　　Saitoh

要　約

太宰治のパーソナリティと適応障害について検討した。病跡学、精神病理学からは人格障害の範疇に入るとされてきたが、いささか再考の余地があると考え、天才・才能人の人格特性との関連から考察を試みた。

自ら世を去った直接の契機は、現実と仮想現実の狭間で呻吟し、なおまた長期にわたる労苦の累積からの消耗症の発症にあったと推論した。

キイワード：

津軽　人間失格　パンドラの筐　斜陽　芥川賞　文化記号論　仮想現実　仮面的適応　道化　依存症　自己愛性人格障害　消耗症　破局　心中事件　愛と永遠

はじめに

桜桃忌は太宰治生誕祭と呼称を改め、毎年6月19日に金木の芦野公園、斜陽館において盛大な催しが開かれている。平成21年（2009年）は津軽出身の作家、太宰治の生誕百年にあたる。

出版界での再版率の高い人気作家は、夏目漱石、太宰治だそうである。とくに太宰作品は若者に人気があると言う。わけても作家としての話題性の多さという点で、太宰が群を抜いている。

本稿は太宰治の作品論、作家論にはあまり関係していない。太宰治その人の人間論に焦点がおかれる。彼は分裂性精神病質者と言われ、自殺未遂を繰り返し、不眠症、酒精・薬物依存症という悪癖にとらわれていた。これを臨床心理学的観点から解析を試みたいと思う。

筆者が太宰作品に出会ったきっかけは、昭和27年の暮れ、日本放送協会（NHK）のラジオ日曜名作座の深夜放送からであった。戦後間もない時期に、河北新報の連載新聞小説「パンドラの筐」を、森繁久弥の絶妙な語り口で聴いたことを忘れない。竹さんへの淡い恋情と失恋物語にやりきれない思いをさせられたことを想い出す。多感な高3の時だった。あれから半世紀を経たが、いまなおその時の記憶は鮮明に蘇ってくる。

精神病理学者たちは、かれの入院歴と予後から、健常者と言うよりは人格障害者（Personality Disorder）の範疇に属するものと認定している。

人格障害であればそう簡単に薬では治らない。精神病質は知的障害とは相違するので、かなり高度な知的作業ないし創作活動は可能である、否、むしろその秀でた着想と推理、異常なほどの集中力、持続性と固執性が常人が到底及ばないレベルの生産的創造的活動を可能にする。まさに天才は努力する人である。

才能者は社交が苦手であることが多い。高慢で人を見下すところもある。平凡な人間が愚昧・愚鈍にみえてしまうというか、一般社会人の生活圏から乖離しているためである。エリート意識、高踏主義と選民・貴族主義に支配されている。自我主張が強く、人には容易に肯んじ得ない所がある。それゆえ才能教育では、人への尊敬と社会的協調性を教えなければならない。

言うまでもなく太宰治が才能人であったことには相違ない。この津軽出身の天才的作家は、一般庶民の暮らしや生活感情にも通じていた。少なくともよき理解者であり同情者であった。

太宰文学の研究は戦中・戦後を通して多くのエッセイや著作がなされてきた。太宰治全作品研究事典まで編まれ、学会発表や論文集、太宰治文学

賞もあり、回を重ねている。弘前大学教育学部外国人教師ウエスタホーベン教授の「津軽」の英訳[4]、「走れメロス」の英訳、それに「走れメロス」の津軽地方語訳「はっけろメロス」まであらわれた[5,6]。

太宰がこの世を去ってから61年後、生誕百年後の今日に至っても依然として人気は衰えず、太宰ファンは後を絶たない。もはや、彼の文学は日本近現代文学史上の古典となったのである。

1．21世紀旗手の誕生

太宰治は、津軽藩の百姓の出であると自嘲的に謙遜して言いながらも、貴族院議員の父祖をもつ出自について語る。「撰ばれてある事の恍惚と不安の二つわれにあり。」と誇らしげに謳うのである。このレトリックを単純に解釈すれば、私は決して貧しい農民の出ではない貴族なのだという自己顕示が潜み、そればかりではなく、文学的才能にも恵まれている。だから恍惚と不安があるのだとなるが、文化記号論的 connotation からは、作家となるべき己の宿命を肯定的に受け止め、必然してその行く末に漠然とした不安を抱く、と両義的に解釈することもできよう。青年期に誰しもが通過儀礼のように経験する自己不信、将来への希望と不安の存在を、ポール・ベルレーヌの言葉をかりて表現したものであろう。

当然のように、かれは市井にあって単に人気大衆小説作家であることに肯んじ得なかった。いつかは敬愛する芥川龍之介のように文壇の寵児になり、一流作家になりたいという青年らしい野心を抱いていた。

芥川龍之介賞はそうした新人作家の登竜門として1935年に設けられた。太宰治は、石川達三と共に第１回芥川賞の候補となり落選した。そのことから「文藝通信」上で、選考委員の川端康成に対して抗議の文章を掲載した。さらに晩年に及んで、文壇の最長老志賀直哉を名指しで非難する挙に出させたのである。(「如是我聞」)。

第１回芥川賞選考委員長の川端康成は「作者目下の生活に嫌な雲ありて、才能の素直に発せざる悩みがあった。」(「文藝通信昭和10年９月号）と評していた。通常であれば、自己努力が足りないので選からもれた。引き続き今後もいっそう研鑽精進しようとなるが、かれの場合はいかにも常軌を逸していた。自信過剰、独善的で我が強すぎたといえば言えなくもない。また、当時はパルビナール薬物依存症にとりつかれ居り、賞金500円は魅力的であっただろう。

彼の文壇に対する過激な攻撃行動は、一見異常なものに思われるが、かつて正岡子規が短歌の革新を目指して、写実主義の主張のために、紀貫之編纂の「古今和歌集」を徹底的に批判したのに似ている。見方を代えてみるならば、太宰治は戦前戦後を通じて、男尊女卑、いまだ封建制度の色濃い立憲君主国家の下で、近代的自我の幻想が解体していく時期に、自意識過剰のなかで自己破壊による既成秩序の破壊を意図した、急進的な文芸改革運動の旗手であった。彼は来るべき新しい時代を予感し、作品を通してその模索と革命を試みたと考えられる。

しかし、かれはこの世の重圧、義理と人情の世界に圧し拉がれ、幾度か挫折して生きる力を失っていた。彼は実に繊細で傷つき易く、プライドを損ねるような事が起きると、衝動的に心中をくりかえした。しかし、その都度フェニックスのように蘇った。なぜか彼だけは死ななかった。わざとらしい狂言自殺だと揶揄する輩もいるが、太宰は異次元の新しい世界を夢見、もがき苦しみ悪戦苦闘していたとみることができる。

自死企図者は、ほんとうは死にたくない、この世に最後まで未練があり、助けを求めている。いざとなるとためらいがある。しきりに SOS 信号を出し、手紙、電話、メールにサインを送る。救助がこないとなると、いよいよ坂道を転げ落ちるようにして、自死企図、未遂、既遂に至たる。人間はそう簡単に死ねるものではない。理由のない自死はあり得ない[8]。

しかし、太宰は人生半ばにあり、現在は貧しく無名で売れなくても、鏡の向こうにある自己像をたしかな眼で見つめ続けていた、と考えられるのである。

ふつうは自己の本心を悟られまい、覗かれまいとする自己防衛本能が働いて、その場のつくろい、心にもないお世辞を言い、手揉みして弁解するなどして周囲に気を配るのが、世渡り上手というものである。傍目八目、世間の噂には戸が立てられ

ないとも言う。世間の人々は表層的ではあっても物事をクールによく見ている。夏目漱石「草枕」の冒頭にあるように、「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」のである。

太宰作品は、仮面・仮装の背後にある素顔・正体を作品上であっさりのぞかせる手法と、私小説的一人称表現技法が多くの人の共感を呼んだ。これは読者に対してはある心理的カタルシスを与える。「死なうと思つてゐた。」。これは小説「葉」のエピグラフである。小説技法の意表を衝く書き出し、いわゆる掴み、これは古今東西の名言の引用ではないし、教訓的、指示的言説でもなんでもない。もちろん持って回った様な言い回し、暗示的物語の展開でもない。誰にだって、何時だって口に出さなくても、そんなことってあるでしょう、という問いかけである。

読者のこころの内奥にある潜在意識を探り出し、代弁する私小説的心理主義に徹していたと筆者には思える。まさに主題・モティーフの頭初における投げかけと潜在意識、無意識への共振である。文学的表現という免罪符によって平気で社会的禁忌を犯す。誰しもが内に秘めてなかなか言表できないでいるか、容易に表現できない事柄を、無造作にはき出すように直裁に言ってしまう。

そこには謎めいた、神秘的、奥ゆかしさとか謙虚さのかけらもない。何のためらいもなく、ザッハリッヒに唐突に人々の内面を表現する手法が随所に見受けられる。かれは直観的に人々の内奥の心理を読み取り、表現することに長けていた。いわば勝れてサイコロジカルな眼力をそなてえていた。作家井上ひさしは、太宰は文章が巧い、掴みがいいと絶賛する[10]。三島由紀夫も太宰の希有の才能を認めるが、自己戯画化は嫌いだと言う[19]。

世上太宰は自己の内面を惜しげもなくさらけ出して憚らない、自虐的破滅型の作家であるといわれている。その作品群はグレイで沈鬱、色彩が無く、まるでモノトーンの世界だとする評者もいる。

だが「走れメロス」は、青い地中海南イタリヤ、シチリア島が舞台である。はるかにナポリを望む景勝の地である。太宰は自然描写はそこそこに人物描写に専念する。ひたむきな友愛に貫かれた物語は、西洋的な心情の深層を覗かせながら、それが東洋的心情にも帰一する普遍的な人間の精神であることを謳っている名作である。

小説「津軽」は、津軽人の過剰なまでに人をもてなし楽しませることに腐心する気性と、故郷の山河の描写が秀逸である。りんご園と津軽富士、古城の松、日本海の荒波と真っ赤に燃えて沈む夕日を背景にしている。決してモノトーンの世界ではありえない。この小説は生まれ故郷へのノスタルジーを誘う名作であり、紀行文学の最高傑作と絶賛する向きもある。

太宰は東西の古典、現代文学に通暁した文人であった。「お伽草紙」「新釈諸国物語」の諧謔性に富んだ物語世界の展開は、親しみやすく、明るく朗らかで、ウイットに富み、ユーモアにあふれている。

作品の背景には浄瑠璃、歌舞伎、落語、講談などの日本伝統古典芸能の影響は見逃せず、また物語の詩的な繰り返し表現とリズムは、津軽地方の俗謡のそれに起源がある、と長部日出雄は指摘している[24]。

2. 太宰治における仮想的現実

文学は言語による表現芸術であり、人間の心の真実を表現することを目的としている。それゆえ作家はいわば精神の宇宙の探求者となる。心の真実を洞察するために苦吟し、さまざまな人間的経験を通して、果てしないこころの旅路に出なければならない。ある時には道徳・倫理、宗教、政治、経済の柵さえも排除して、純粋な透徹した人間の精神世界を垣間見、そこへ我が身を投じていく。

人間における自由、個人の精神的自由を獲得するためには、近代的自我の確立が前提する。封建社会の倫理道徳を排して、ある時は親族の土地・財産への依存から脱却し、独立することが求められる。太宰の主張にはE.フロムの「人間における自由」の思想に相通ずるものがある。

従来の因習にとらわれず、日本人が伝統的に墨守してきた家族主義さえも否定して、妻が一方的に夫に隷従する、親が子どものために犠牲を厭わない、盲目的に奉仕することもない（子どもより親が大事）とさえ主張する。まして、家族のために娘が身売りをするなどということはあってはならないのだ。彼の時代には、凶作になると上野駅

辺りに「娘買います。」の立て看板がたてられ、人身売買が横行した。そのような時代に太宰は、精神の自由、個我の確立のために、現実と非現実の間を彷徨し、仮想的現実を描き出し、かつ虚構的精神世界を構成し、そこに身をおくようになったのである。

かれにとって文学世界がすべてであり、いつしか文学的仮想現実が生の現実性を帯び、日常生活の場での現実性が薄らぐということも起こり得た。現実と非現実との混同、逆転もあり得る。そこには日常性や社会性が希薄化し、世間の眼には、ある時かれの行動がアナーキィで、反社会的、非社会的奇行と映ることがあったかもしれない。そのときかれはまさしくバーチャル・リアリティの世界に生きていたのだと考えられる

太宰の生い立ちと生育環境は、決して恵まれていたとは思えない。母親は多産で病弱しかも貴族院議員の妻、彼は乳母と叔母きゑと子守のたけに育てられている。幼児期に体験したマザー・コンプレックスが、到底癒しがたい愛情飢餓(Affection Hunger)を生み、終生過剰なまでの母性愛の希求を続けさせたのであろうか。かれの心は砂漠の砂のようにいつも乾いていた。代理の母親の愛に満たされないものを感じ、それが度重なる心中事件を惹き起こさせた原因の一つであったと思われる。

この辺りの事情については、岸田秀が詳細に論じている。「太宰治は甘えの原理のもっとも純粋で忠実な思想家であり実践家であった。そしてついには甘えの原理に殉じたのである。」(16、109頁)。他にも、長男、次男の相次ぐ夭折、長女26歳、3男は27歳、末弟16歳、次女34歳、父53歳でいずれも病没している。彼は墓標に囲まれて育った様なものである[3]。

彼には対人関係障害やコミュニケーション障害が推定される。社交術の未熟さというか、人との付き合いに気を使いすぎ、すぐ疲れてしまうのである。自尊心が強く、我を通す傾向があり、酒の力を借りないと何もできないという不都合さがあった。他人の気持ちを斟酌して適当に対応できないため、社会的認知不協和が生じ、社会的孤立を招きやすくなる。

周囲の人々には面倒の掛け通しなのに、本人はあまりそれを気にしていない。かえって親身に世話をしてくれる人に責任転嫁してすまし顔である。価値の倒錯と論理的詐術を弄する傾向も無きにしもあらずである。こうなると天才は家庭や社会関係を犠牲にして仕事に熱中し、社会貢献するとばかり言って居られない。

太宰ひとりに限らず、現実と仮想現実との間の大いなる齟齬矛盾から、多くの才能ある有名作家達は、自滅の道を辿ることになる。作家の自死の主な理由に「もう書けなくなった」とあるが、仮想現実を住処とする作家の世界は、われわれが住む現実社会との間で摩擦軋轢が多いのも事実である。端的に言えば、恋愛至上主義、テロリズム、新しき村の運動とかＳＦ物語などは、文学上では架空の物語として自由自在に表現できるが、現実世界で実際にそれを行えば、世間一般には許容されないか破綻することが多くなることは明らかであろう。現実離れしているが故である。

しかし、美しいラヴストーリィも、想像や空想あるいは見聞だけでは借り物の表現の域をでない。迫力ある真に迫る物語構成には、現実世界の生の体験を下敷きにせざるを得なくなる。特に、太宰のような話体を表現形式とする小説においてはなお更である。そこに現実社会を律しているタヴーの侵犯が起こる。太宰治はある時親交のあった葛西善蔵に、作家はどんなことでも実際に経験することが必要なんだ、と語っている。時には不倫も背信もである。

田部シメ子との鎌倉心中事件はその例に当たる。上京してきた長兄が、小山初代との婚約を約束して金木に連れて帰る。だが初代からは手紙が来ない。例の政治活動も気乗りがしなく、また反神的な作家活動にも行き詰まりを感じていた時、銀座裏のバア・ホリウッドの女給シメ子に言い寄られ、かれの犀利な頭脳は、たちまちスクランブルでのクラシュ状態に陥ったのである。二重に絶望した結果として、行きずりの女性と入水するという、実に衝動的利那的な事件の経緯がみられる。(「東京八景」)

芸術至上主義を標榜し、わが国近現代文学における無頼派、新戯作派と称される一群の作家たちの多くは、内部の精神的葛藤に苦吟した果てに惨憺たる末路をたどったのである。

太宰文学を特徴づけるものは、自然主義文学への反逆、文学芸術至上主義、自己戯画化、パロディ、道化、世俗的徳目に対する自虐的受難者の表情、聖句、ウイットとユーモア、ナルシシズム、ロマンチシズム、無頼派の主張、作品に底流する二律背反と自己矛盾の存在などが挙げられよう。

3．太宰作品のアイロニーとレトリックス

太宰作品の主人公はどちらかというと弱者、自己卑下、ニヒリスティク、受け身的であり、消極的対人態度がうかがわれるが、それでいてどっこい簡単には引き下がらないところが見え見えである。負け犬的存在で終わらない。さかんに自己主張を続けるところが、見せ所、聞かせどころとなっている。

次第に回り舞台のせり上がりのようにして物語は展開していく。ある時は穏やかに優しく、そして時には激しい言葉で当たってくる。それはジャブとボディフック、それにカウンターパンチを多用するボクサーのようでもある。弱そうにみえて決してそうではない。したたかなのである。ゆっくりと搦め手から本丸に迫る手法を執る。

作品中にみられる多様な特徴は、破滅、破局、終末の予感、墨絵の世界、煉獄の文学、地獄と現世との間道、煉獄絵図そして天国の階段への憧憬、滅びの予感、実存へのしがみつき（確執、固執）、時間的展望の狭隘さ、過去・未来へのこだわりよりは現在時点での関心事、現実主義者、自己愛と自己中心的利己的個人主義、自己の目的のために他者を犠牲にすることを厭わないなどであり、「道化の華」「人間失格」において顕著である様に思われる。

絶えず自己の想念の世界に他者を引き入れようとする。かれは果たして近松門左衛門の浄瑠璃の世界に遊んだ男なのか。太宰の口癖は、僕と一緒に死んでくれますか、であった。女たちは逆らうことなく、まるで覚醒暗示か催眠術にかかったように、貴公子然とした太宰の教祖的言説に魅入られてしまう。恋する一途な女心がそうさせたのか。

かれが生きた時代、記録写真でも明らかなように、戦中戦後を通して国民服や軍服着用、もんぺ姿が普通の御時勢に、和服にマント、襟巻き姿はさぞかしダンディに映ったに違いない。

秀でた才能をみとめられながらも、第1回芥川賞の受賞ができなかった主な理由に、審査委員長をつとめた川端康成による、太宰の不穏な生活態度の指摘があった。（「文藝通信　昭和10年9月号」）。正統な日本文学の旗手ないし継承者としては、品性が問われ、今ひとつなにかが欠けていると思われたようである。

4．太宰治は本当に自己愛性人格障害者なのか

島崎敏樹は太宰を「分裂病質」とし、かれの妄想体験を指摘している。また東京武蔵野病院中野嘉一医師のカルテには「慢性パビナール中毒症、精神病質（Psychopath）の記載があった。今日では人格障害のうちの「自己愛性人格障害」の範疇に入るとされている[20]。

心理学者であり、精神科医でもある宮城音弥は、私は天才をすべて精神病質者とするクレッチマーに賛成して、天才の病理説を支持すると同時に、つねにこう主張しているのである。創造性は社会的適応性と逆相関する。天才は社会的適応性を犠牲にして創造的活動を行う者だと。（「桜桃：一つのカルテ」）。

アメリカ精神医学会のDSM-IVによる人格障害のうち自己愛性人格障害の診断項目をみると、表層的にはそのすべてが当てはまるようである。これは精神医学的症候論に基づくもので、受診時の現症カルテによっている。関係者が記した彼の日常生活の記録からは、それとはいささか異なり齟齬が生じる。

また諸家の評論には、作者の人物像と作品中の人物描写とが混同されている面も考えられ、おおいに再考の必要があると思われる。たとえば、太宰文学の評論家のうちには、「人間失格」の大庭葉蔵は間違いなく太宰の分身であるとして、これは私小説的、暴露的、告白小説であると断じ、彼自身のパーソナリティと同一視してしまうという、第一義的誤りを犯しているところも見受けられる。巧みな書き手である太宰は、虚実織り交ぜて真に迫った独特な人物像を描きだし演出する。われわれ読者が惑わせられるのも宜なるかなである。作家井上ひさしが、「太宰は文章が巧い。」と賞賛している程だから、われわれは疑心暗鬼になり、作品の裏の裏まで読み取らなければならなく

なる。

彼のライフヒストリーから、太宰は内向的、温順、神経質、おどけ、諧謔趣味のある性格者であったことは認められるとしても、誰しもかれが直観と推理能力にすぐれ、過敏であり、想像力豊かな才能者であったことは首肯できるであろう。しかし反面において、徴兵検査は丙種合格で軍歴なし、家督相続権無く、長兄にはまったく頭が上がらない。肺病を病み、大酒飲み、おどけ・冗談好きであった。

それにしても、かれの容貌からどこか陰気くさい印象を与えると見る目もあったが、近づく女性たちは、太宰のすらりとした長身、理知的で端正な容貌に惹かれていたらしい。

当時は日清戦争がそのまま第二次世界大戦に組み込まれ、日本は大陸と太平洋にわたる大規模戦争に狂奔していた。神国日本は不滅である。

「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、顧みはせじ。(大伴家持の長歌、東儀季芳作曲)」などの軍歌がはやり、「撃ちてし止まん」と、男子が国民服に女子はもんぺの服姿、丸刈りの長髪禁止であった。彼の活躍した時代は、大正ロマンチシズムの余韻を残した昭和前半であった。日清戦争、太平洋戦争のまっただ中の絶対主義、帝国主義、軍国主義全盛の時代であった。子ども達も戦争ごっこに明け暮れ、末は博士か大臣かよりも、軍神になることを夢見た時代である。若者たちは捨て身の特攻攻撃を賛美した。「武士道と云ふは死ぬ事と見付けたり。」の葉隠精神が精神的支柱となっていた。出征兵士を見送る歌にも「見よ東海の空明けて、旭日天に輝けば、……死んで帰れと励まされ…….」のフレーズがみえ、予科練習生の歌にある「お前と俺とは同期の桜…咲いた花なら、死ぬのはいまだ。」「男ならやってみろ」と続く。男性はお国のため潔く命を捨てる、女性はしっかりと銃後を守って、兵隊さんのために後方支援するという、国をあげての「欲しがりません。勝つまでは。」の国民皆兵、戦時総動員体制下にあった。このような国難は日本史上、蒙古襲来の元寇の役以来である。

卑近な話になるが、当時兵隊に行かない大人、特に丙種合格者は事実上不合格と見なされ、当時の小学生からもおおいに軽蔑され馬鹿にされると言う事情があった。まして、共産主義活動は非合法であり、それに参加することは反国家主義、非国民のレッテルを張られ、人々からは忌避された。

ほかにも、自由恋愛などはもっての他で、好きな相手と結ばれることに憧れはしていても、当人達は人目を忍んで隠れて逢い引きするよりなかった。男女が連れ立って歩くこともままならないご時勢であった。かたわら蓄妾、妾腹、妾宅の語が横行し、蓄妾は男の甲斐性とまで言われた。婦人参政権は無く、売春防止法もない時代背景があった。

当時はハンセン氏病(らい)、肺疾患は不治の病、感染症、難病とされ、家族さえ肺病マキと言われ世間から忌み嫌われ、恐怖の念をもって警戒された。当時小学生であった筆者は、サーベルを下げた警官も怖かったが、ほかにも肺病に罹患した家の前を通る時は、息を止めて小走りに通り抜けたことを思い出す。絶えず家族感染の恐怖があった。後に結核はペニシリン、ストレプトマイシン、パス、ヒドラジット、さらにカナマイシンなど治療薬の開発によって不治の病ではなくなった。

津島家は長男、次男が相次いで肺疾患のため夭折しているから、太宰にとっても少なからず脅威となっていたものと思う。かれには死はいいものだ。何時死んでもいいなどと死を賛美するような言動がみられる。本心でそう思っていたのかは疑問であるが。(「わが人生観」)。

かれが心の内でなによりも負担を感じていたことは、世間づきあいという側面であったかもしれない。下女・下男、女中など使用人を含めると30人という大家族であった。おそらく自分の居場所が見つからず、絶えず周囲に気配りが必要であったと思われる。かれにとって子守のたけの存在は大きい。誰よりも慕っていた。幼少期の経験はたけを抜きにして語れない。(「おもい出の記」「パンドラの筺」)。

太宰は生涯を通して道化を装うことで、その気弱で不器用な社交術をカバーしていたのではなかったか。それによって世間から、家族・身内からも距離を置き、ひたすら自己のシェルターに閉じこもり仕事に専念するというスタイル、文字通り素顔を隠すために仮面をつける。シャイで弱気な性格を丸出しにすることを恥じ、仮面的人格を形

成した。だからいつも酒の力を借りる。

見かけの格好、すなわちスタイルに気をつかいながら、ユーモア・駄洒落を連発して煙幕をはり、世間のご機嫌伺いに相つとめる。かれはたちまちピエロに変身し、道化を演じ続ける。それでたぶん生来無口で陰気な性分をひた隠しにしていたのであろう。

かれは斗酒を辞せずの大酒飲みだったが、ただ酒が入ると普段とは違い、人が変わったように生き生きとし多弁になったらしい。無頼漢である。いつも素顔を隠し仮面を付け道化に変身した。正体を知られることをひたすら懼れた。

酒精依存症、薬物依存症のほか、進行性肺結核の重篤化、経済的逼迫、以前から続くひどい不眠症、度重なる芥川賞受賞の失敗による失意・落胆、かかわりのあった女性に対するケアと罪障感の精神的ストレス（重圧）などなどからの鬱状態、加えて自己毀損的破滅的なイメージの増幅が、ついには絶望的な自我の崩壊へと導いていった。

見方を変え、かれのパーソナリティ適応について、交流分析という視点からエゴグラム分析の事例を通して分析を試みるならば、これはあくまでも仮定の問題であるが、太宰は本来他者肯定、自己否定のN型であったかもしれない。だがしかし、作品上では、自己肯定、他者否定の逆N型にみえる。自己中心的で、自我主張が強く、批判的、冷淡で、容易に人に従わず、かえって人を道具的に利用して憚らない。

わたしはあなたが見ている私ではない。内実は違っているのだ。わたしの真実は誰にも分からない。「人間失格」の大庭葉藏は太宰の分身であり、多少デフォルメされて書かれていると言われる。自己の一代記をなぞって、忠実に描いていると評する人もいるが、自己の内と外の現実の対比と深刻な苦悩の軌跡を辿り、巧みな自己分析、自己洞察と深遠な思索の跡が伺われることによって、人々は共感を覚えるのである。

N型人間の日常は、他者に奉仕し、人の言いなりになり、適当に利用されることが多い。ノーと言えない。精神的に安定した居場所を見つけにくい。自分のことよりも他人の心配ばかりする。世間的にはいつも損な立場にいる。いうなれば他人に奉仕するために生れてきたようなものである。なんでもかんでもつい引き受けてしまうから、しまいには収拾がつかなくなる。

太宰の文学は現実と正反対の精神的状況を表している。子煩悩で妻には口答えしない従順な夫、冗談ばかり言い、家族を大事にした太宰であったが、文学上の仮想現実的表現になると、「家庭の幸福は諸悪の本」（「家庭の幸福」）、「子どもより親が大事。」（「桜桃」）である。親としての義務責任は十分承知している。当時の親の滅私奉公的な家族愛の標榜に対して、親の人間としての実存を主張するレトリックであったと考えられる。かれは適当に上手を言い、利を貪る市場的人間を嫌悪した。嘘偽りのない生産者的人間像を理想の姿として描いた。

太宰は「富士には月見草がよく似合う。」（「富嶽百景」）と言ったが、名峰富士山を描出する時、写真家がイメージする富士とは違って、身近な親密さで描くのである。御坂峠の天下茶屋からの眺望である。「いいねえ。富士は、やっぱり、いいとこあるねえ。よくやっているなあ。」。「かなわないと思った。富士はやっぱり偉い。」とまで言う。まるで人間が人間に話しかける様に表現するのである。

喩えて言うなら、作者の情念が山に投影され転移し、それが逆転移して、富士山そのものが同化してきて、彼の想念の世界に引き込まれていくのである。もはや通りいっぺんの旅人によるサイト・ビュウイングでも、銭湯のペンキ画か風景写真でもなくなる。自然が模倣する。単なる自然観賞を超えて、自身の心像として心内にイメージ化されてしまうのである。

この一見異様にみえる表現にも、深層心理の襞を覗かせる手法が見いだされ、彼一流のレトリックであろう。このようにみてくると、かれの作品上にみられる騙りのテクニックの謎が、すこし解けたような気がする。

太宰は気付いてみたら、文学趣味の女性たちにとり囲まれ、身動きがとれなくなっていた。女性たちは、文学的にはまだまだ未熟で自己満足していないし、過剰なまでに他者肯定依存のタイプになっているから、同じN型に近縁することになる。双方の相性は抜群である。太宰は神格化され、女性は単なるアイドルファン以上の存在になる。

N型人間は、なんでもオールOKなのだから、人間関係の破綻は時間の問題であった。勿論、このような類型論だけでは、説明が可能になるとは思われないが、少なくとも太田静子、山崎富栄はバーチャルリアリティの桃源郷に存在した美しい女性たちであった。桜桃がよく似合う。

太宰のカタストロフィは、そうした状況をつぶさに察知し、観取し、同一視した山崎富栄の出会いからはじまったかもしれない。体力の消耗、病気の進行と重篤化、精神的疲弊が複合して心身の消耗症（Marasumus）を発症させ、ついには創作意欲の喪失に至ったのであろう。自己実現をいささか果たした様に感じながらも、何でも引き受けてしまうという性分、もうこれ以上は無理という重圧感、自分が自分でなくなるという自己同一性の減衰、自己喪失感が漂い、極度のうつ状態、自暴自棄的意識状態、破滅の予感から、ついには精神的カタストロフィが訪れた。

何よりも従前の自然主義文学に対して、人間の実存と精神の自由を謳った、近代日本文学における前衛的主張は、軍国主義、専制的国家主義から戦後日本の民主主義へのコペルニクス的転回によって、現実のものとなった。かれは主張点を失った。もはやかれの桃源郷、バーチャルリアリティに遊ぶ必要性が無くなった。回帰してみて気付いたかれの現実は、以前の仮想現実が現実化した姿だった。

第二次世界大戦後すべての日本人は、挫折感と自己喪失感に襲われ、うちひしがれながらも、荒廃した国土を前にして、社会的価値観の転換と新たな再生の道を模索していた。国土の復興が叫ばれ、故郷の再生が共同体的意識を刺激していた時代、改めて「斜陽」と紀行文学としての傑作「津軽」が評価されることとなった。

彼の文学は人間性が抑圧された時代のアンチテーゼか徒花として、読者の関心を集めたが、戦後はもはやその必要性は無くなったかにみえた。戦後焼け跡から高度経済成長時代への躍進はかつての日本社会の幻影追う必要はなくなり、大日本帝国の栄光は、憲法第９条、戦争の放棄という不戦の誓いとともに平和主義、国際協調が国是とされるにいたった。劇的に社会一般の思潮も大いなる変革を遂げたのである。

しかし、巷には民主主義とともに資本主義、商業主義がはびこり、民族の純血性は失われた。軍国主義、大和魂、儒教思想も一掃された。教育勅語のなかの「爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭倹己ヲ持シ博愛衆ニ及ホシ.....」の教えは過去のものとなった。連合軍占領下での戦争責任追求、平和憲法公布、農地解放、民主主義教育などについて論議は、自由と平等の新しい平和日本を予感させた。

婦人参政権と売春防止法の成立に対する国会の混乱振りと、成立に反対する男性議員の所行は言行不一致で矛盾し、遅々として進まなかった。このような世情のなかで、いわば無頼派の文学運動は、一つの歴史的事実として、近現代日本文学史上に記録されることになったのである。

テレビ、パソコンが普及し、映像によるマス・メディアの介在は、文字文化の衰退を招いた。手紙通信は個別電話加入と携帯電話、パソコンネットの利用に取って代わり、社会変革が著しいのが現代である。

太宰は、おそらくかれ自身の文学と人生の目標を失っていたにちがいない。世の中がすっかり変わってしまったのである。どの文学賞もとれない、単に無冠の人気大衆小説家でしかなくなっていた。すでに破滅しなにもかも失った日本人には、民主主義の旗印の下で、身勝手で自己中心的な主張を貫くことは許されない。建前と本音とを使い分け、建前上公序良俗に反する内容のものは受け入れられないわけだから、われわれは再び太宰作品を、バーチャルリアリティの世界にいったんは返すより他はない。それゆえ「人間失格」は、すでに古典となってしまったかにみえる。

しかし現代人は依然として、「人間失格」の大庭葉蔵的精神的状況におかれているのかもしれない。V.E. フランクルは、多様な価値観が横行するか、没価値的な現代社会において、現代人は多かれ少なかれ精神病質的人格をそなえている、と指摘する。

相変わらず個人的主張と自由は制限されており、過当な社会競争の下では、勝ち組と負け組の存在があり、理不尽な衝動的犯罪、青少年非行、通り魔殺傷事件の頻発は、現代の世相を反映している事を否定できない。自己中心的、身勝手な、

衝動的な犯行である。お笑い芸人が受け、漫画・アニメが流行る所以である。とかくにこの世は住みづらい、と感じている若年層が増えていることを思えば、これからも時空を超えて太宰作品は生き続けるにちがいない。

それにしても昨今の太宰人気はどうだろう。生誕百年記念のためばかりではなさそうである。太宰ブームが起きている。彼の文学は閉塞感が漂い社会に理想と希望を持てない時代の徒花なのか。将来に希望が持てず、人間不信に陥る青年は何時の時代にも存在する。それが根強い太宰人気の秘密であろうか。

太宰作品の「斜陽」「人間失格」は、たとえて失楽園のアダムとイヴ、諸説の一つにあるダヴィンチの流産してもの悲しげに微笑するモナリザに譬えられるかもしれない。人間の原罪、現世の苦悩と不安をあからさまに、つぶさに騙り、物語った作品群であろう。虚構として創作される物語は、人の心を動かしてこそ、初めて文学美を生み出すことになるのはいうまでもない。心の真実を言葉に表現してこそ芸術たり得る。太宰作品においては、生と死、善と悪、意識と無意識、現実と非現実、愛と憎しみ、生産と破壊、歓喜と悲哀、幸福と不幸などが二律背反としてあらわれる。

アメリカの心理学者J. S. ブルーナーに従えば、彼は観念的論理的で哲学的思索型であるよりは、感性的感覚的で直観的な思考型に属する認識形式を備えていたと思われる。物語の展開は帰納的であるよりは演繹的である。時には物語の入れ子構造の関係枠の中から登場人物があらわれ、新しい人物が現れると話は枝分かれ構造のプログラムに従って分節化していくが、最終的に整合性を示して完結する特徴がある。

太宰作品はわかりがいい。平明な日常的会話（話体）がそこにはある。読者は容易に作中人物にアイデンティファイできる。しかし、読者は一様に先がどうなるか予測がつかないため、それでおもわず引き込まれていく。結末よりも屈折した物語プロセスの面白さが見いだされる。勧善懲悪、義理と人情の古い説経節的な臭いはしない。どちらかというと、篠懸の文学散歩道を散策するといった風情がある。かれの文学は誰からも愛される。

太宰は心底から栄誉を望んでいた。芥川賞である。２度候補に上がり失敗した。３度目は候補からはずされた。その無念が後の絶筆に、「井伏さんは悪い人です。」と書き記す事になったのであろうか。はじめから終わりまで、なにからかにまでお世話になり、終生の師と仰いだ文豪井伏鱒二への最後の言葉がこれである。

この謎は、今日もなお解けないままである。あえて文化記号論的推論を試みるならば、先ずは、サロンならぬ文壇代表への讒訴、なぜ一言あなたの小説は立派な文学ですよ、と言ってくれなかったのでしょう。私はもうこれ以上は無理ですという気持ちを、最も尊敬する大御所井伏先生にぶっつけてみた。芥川賞は自己の作家としての存在証明以上のものであった。彼ならずとも現在の自分自身に満足している人は少ないかもしれない。人生における自己実現は手に入れようとすると、いつも彼方に遠ざかるものだからである。かれの場合は、自分の小説が単なる私小説以上のものであるとの自負があり、決して流行大衆小説家、三文作家でないという証明がほしかったのであろう。否かれにとって文学は命、生きる証しであった。

そして、テクストのもう一つの意味解釈コードは、作家としてここまで育ててくれた事への感謝と怨み節、あなたは暗黙のうちに賞をとれる作家になれと言ってきた。作家として頂点に立てると言っていた。自分でもそう思ってきたけれど、所詮は無理だった。このようにし向けたあなたを恨めしく思いますと。「汝を愛し、汝を憎む。」（津軽」）は、太宰一流のレトリックである。

この一見逆説的にみえる、二律背反的表現には、怨念ばかりでなく、並々ならぬ感謝と甘えと思慕と敬愛の念が込められていたと考えられないだろうか。彼の文章の入り子構造的表現には、さまざまな暗喩が潜んでいる。世に悪友という言葉もある。切っても切れない、離れようとしても離れられないというような相互依存の人間関係のことである。

もうわたしは疲れました。ごめんなさい。期待に添えなくて。わたしはあなたのいい子になろうとしましたが、あなたに出会って迷い道に入ってしまったらしい。もっと自分らしく生きたかったのに。もう遅い。「あなたは悪い人です。」。いま分かりました。私は相当なワルでした。でも先生

もワルですよね。わたしはそれに気付いていました。この世を去るに際し、「悪人正機」をいまはっきりと悟ったのです。悪（おおいなる畏敬の念を込めて）井伏鱒二先生、こころからあなたを尊崇し敬愛しています。有り難うございました。また天国であいましょう。「私はあなたを愛し、憎みます。」」。

佐藤春夫宛の手紙（昭和11年２月５日）にはこうある。

「芥川賞をもらえば、私は人の情
に泣くでしょう。さうしてどん
な苦しみも戦って、生きて行け
ます。私を助けて下さい。」
（中野嘉一：41-42頁）

と哀願している。これは人並みはずれた渇望である。太宰は佐藤春夫の手引きによって、この３日後に佐藤春夫の弟が院長をしていた東京武蔵野病院に入院させられたのであった。作品「人間失格」の原体験は、この時の闘病軽験が元になった。

太宰は特に戦後の３年間は、売れっ子作家となり、文壇で確固とした地位を築いていた。新聞、雑誌の投稿、単行本、全集の出版、講演会など多忙な日々を送っていた。高額な原稿料収入もあり、生活基盤は安定していたと見られる。

しかし、ここに一つの疑問が残る。それにもかかわらず健康が悪化し耐えられなくなった時、なぜ太宰は自ら望んで再入院し,治療を受けようとはしなかったのだろうか。本人も周囲の者もそうしなかった。かれは病状の悪化を隠し、我慢をつづけ、素知らぬ顔して、以前のようには人に訴えなかったのではなかったか。このとき痛みに耐えかねて、密かに睡眠誘導剤、パルビナール注射に頼るようになっていた。薬物入手は富栄の役目であった。富栄の日記にはこうある[33]。

修治さんは肺結核で左の胸に二
度目の水が溜まり、このごろで
は痛い、痛いと仰有るの。
もうダメなのです。
（昭和23年６月13日）

山崎富栄の次兄年一が太宰と同年齢で、弘前高校の卒業生であった。出会いは昭和22年３月美容室の同僚中村貞子の紹介による。太宰さんは人に言えないことをなんでも私に話してくれます、と記している（「玉川上水水死行」）。

５．永遠の愛

おそらく太宰は、唯一富栄にだけには心のうちの苦悩を打ち明け、一緒に死のうと誘ったに違いない。双方合意の上での心中行であったと思われるのである。決して、世上言われるように、富栄が天国で結ばれる恋のために扼殺したのではない。なぜなら富栄には自死する、それほどの積極的理由は、他に見あたらないからである。

井伏鱒二の指摘は若干妥当性を欠いている。一応溺死と言うことになっていて,当時の捜査記録、死体検案書や司法解剖所見等は部外秘で公表される筈もなく、すべて伝聞による憶測の範囲を出ていない。カルモチン、青酸カリなどの薬物を飲んだなどと書き記すのは、伝聞による憶測の範囲を出ず、如何にも無責任な話である。

仮に秘密事項の漏洩があれば、業務上の守秘義務違反の疑いがあるし、さらに人権侵害の疑いさえ持たれるあろう。現場に捨てられてあった小瓶から睡眠誘導剤を利用した可能性は無いとは言えないとしても、可能であれば司直の捜査資料に基づいて発言する事が適切妥当であろう。現在でも相変わらず侏儒の言葉が横行している。

確かに富栄には、新婚間もなく出征した夫奥名修一が戦死し、実家の姓である山崎姓に復帰して間もないという事情があったにしても、かくも短い期間の付き合いだけで、心中相手になろうとしたことは理解しがたい。

考えられることは唯一同情のみとなるが、それなら、聡明な彼女が太宰に病気治療をすすめ、自死を思いとどまらせることを何故しなかったのだろうか、単なる独占欲がそうさせたのだろうか。相手は他に愛人が居る妻子ある男性である。山崎富栄（1919-1948）は、なにもかも飲み込んで、太宰の真意を汲み取り、冷静に状況判断をして決断した。自分に約束された将来の栄光、恵まれた境遇のなにもかもかなぐり捨て、自己犠牲を払う決意をした。純愛を一途に貫き、恋に殉じ、29歳

という短い生涯を終えた。文字通り、恋に生き、愛に生きた、のである。

最大の原因は太宰が女性遍歴の果てに富栄と結婚を望み、富栄もまたそれを強く望んだということであった。太宰は富栄に「君と一緒になれたらもっと生きて、いい小説を書くよ。」と話していた。恋愛至上主義者であった。最早この世では叶わぬ恋、両人はそれを意識していた。結ばれるために双方合意の上、心中を決意したのである。

彼女の日記の断章を次ぎにあげておく。

愛してしまひました。
私は、先生を愛してしまひました。どうしたらよろしいのでございませうか。お逢ひできない日は、なんといふ不幸せ.....。
（昭和22年５月19日）

わたしが、ほんとうに心からの幸せを感じるときは一つだけ。ほんの短いとき、それを信じておりますの。
それがあるから苦しい生活にもたえているのです。
それは、あのお方の恋したひととして、御一緒に、長い間待って、楽しみにしていた、永遠の旅立ちをするときなのです。」
（昭和22年12月11日）

「サッちゃん、い（死）くよ」
「お願い、つれていって」
合点されて、
「一緒にい（死）ってくれる？」
「ねえ、お願いです。私ひとりを残さないで、つれて死って下さい」
「いろいろ、世話になったねえ」
「ううん、私こそ.....そんなこと」
「体さえ丈夫であったらなあ、なんでもないんだのに、サッちん、ご免よ」
「いいえ、初めから、死ぬ気で恋をしたんですもの、ご免だなんて、仰有らないで下さい。あなたに、悪いとこなんて、一つもありはしませんわ。」
修治さんは可哀想です。結核なんて病気を、神様は.....。
「君は、惜しいよ。僕には、君を死なすなんて惜しいよ。」
「いいえ、あなたこそ、私にはもったいないおひとです。すみません。御免なさい。御一緒につれていって下さいね。」
「一緒に死んでくれる！」
「うん」
「ありがとう、とみえ、随分苦労かけたね。あの世といふものを、僕は信じないけれど、もしあったら、君をもっと大切にするよ。どこへでも連れて歩くよ。可哀想だなあ。」
「ううん、可哀想だなんて、あなたこそ、あなたのやうないいひとなんて、もういないのに、い（死）く日をきめて下さい。用意しておきます。」
（昭和23年１月13日）

世間の人々からみれば、単純な理由から、あるいは何の理由もなく衝動的に自死する人が少なくない、と言われているが、おおくは病気、経済的行き詰まり、厭世による場合が考えられる。どんな事情があろうとも、そこには時間的展望の消失、刹那的、眼前的思考、衝動性、共同体との乖離、絶望、うつ状態、意欲減退などが考えられる。太宰は、「さらば読者よ、命あらばまた他日。元気で行かう。絶望するな。では、失敬。」（「津軽」）と言い置いて、当の本人は絶望してグッドバイしてしまった。否、恋に生き、文学に殉じたのである。

かれは「私は自分を変人とも、変わった男とも思ったことはなく、きわめて当たり前の、また旧い道徳などにも非常にこだわる質の男です。」（「わが半生を語る」）と語っている。かれ自身の自嘲的言葉のなかに、その気質に自虐、自嘲、自己分

裂的、自己懐疑的な傾向があることを自認していたようである。

「自分はぶざまな辻音楽師だ。自分はもう死んでいる。私はいまは人ではない。」「芸術家という奇妙な動物」に過ぎない、と書いている。(「鴎」)。未完の「グットバイ」には、かれの現世への未練、生への執着を垣間見る思いがする。

真の愛は永遠の生を約束する。愛は不老不死の妙薬、しかし、愛の探求者はいつも孤独である。浮き世の諸々の柵を捨て去り、真の愛を直観した時、独りの人間としてのまったき自由を得たと信じた。そのとき、愛の神の幻影が現れ、現世に別れを告げる時がきたことを悟った。ついに燃焼し尽くした (burnout) のである。否永遠の愛に生きたのである。

ここにおいて、太宰は永年の津島家・長兄の桎梏から、そして文学界とりわけ恩師井伏鱒二の柵からも解放され、はじめて真の精神の自由を獲得したと言える。だれでもがもつであろう根元的不安 (死) を克服したのである

最後の瞬間まで、彼の澄んだ両の目は、鏡の向こうの自己像を、たしかに観つづけていた。

結びに代えて

葬儀委員長として太宰の追悼を行った豊島与志雄は、次のように山崎富栄について述べている[22]。

「太宰がどんなに我儘なことを言おうと、どんな用事を言いつけようと、片言の抗弁もしない。すべて言われるままに立ち働く。そればかりでなく、積極的にこまかく気を配って、身辺の面倒をみてやる。もし、隙間風があるとすれば、その風にも太宰をあてまいとする。それは、全くの絶対的奉仕だ。家庭外で仕事をする習慣のある太宰にとって、さっちゃんは最も完全な侍女であり、看護婦であった。…死は、彼にとっては一種の旅立ちであったろう。その旅立ちに、最後まで、さっちゃんが付き添っていてくれたことを、私は、むしろ嬉しく思う。」

(長篠康一郎「太宰治武蔵野心中」)

時に満年齢太宰治39歳、山崎富栄29歳であった。

末筆であるが、太宰治とゆかりの深い津島美知子、津島佑子 (本名里子)、太田静子、太田治子の諸氏は、いずれも女流現代作家として名をなして居り、数々の文学賞も受賞されている。津島園子氏は音楽家、画家として活躍されており、太宰の芸術至上主義の血脈が、なおも永永として流れ続けていることを思わずには居られない。

おわりに、作家太宰治を偲び、無名のギリシアの船乗りの詩を捧げて、この小論を閉じることにしたい。

この岸に眠る
難破船の　一人の水夫が、
あなたに　船出を
うながしている。
われわれの船は　沈んだが、
その時でも、
数多くの船は
嵐を衝いて、
進んで行ったのだ。

文　献

(1)　青土社編　ユリイカ 特集太宰治／坂口安吾－無頼派たちの"戦後" 青土社　平成20年 (2008年)
(2)　太宰治　愛と美について　大和書房　6-30頁　昭和44年 (1969年)
(3)　太宰治　わが人生観－恍惚と不安－大和書房　昭和40年 (1965年)
(4)　Dazai,Osamu　Tugaru. Translated by James Westerhoven, Access 21 Publishing Company. Aomori Japan, 1998.
(5)　Dazai Osamu　Run, Melos! and other stories. Translated by Ralph F. McCarthy, International Ltd. Koudansha 1988.
(6)　Dazai Osamu　Run, Melos, Run Translated and Retold by Michael Brase, IBC パブリッシング 2005.
(7)　長谷川泉編　病跡からみた作家の軌跡　国文学解釈と鑑賞　4月　臨時増刊号　第48巻　第7号 618号　312-320頁　至文堂　昭和58年 (1983年)
(8)　林田茂雄　自殺論　三一書房　昭和42年(1967年)
(9)　春原千秋、梶谷哲男　昭和の作家　芸術と病理パトグラフィ双書・別巻　金剛出版　261-275頁 昭和50年 (1975)
(10)　井上ひさし・こまつ座　太宰治に聞く　ネスコ 平成10年 (1998年)
(11)　梶原悌子　玉川上水情死行　作品社　平成14年 (2002年)
(12)　片山英一郎　太宰治情死考　たいまつ社　昭和55年 (1980)
(13)　鎌田　慧　津軽・斜陽の家　祥伝社　平成12年 (2000年)
(14)　亀井勝一郎編　太宰治研究　新潮社　昭和31年

(1956年)
(15)　河村正敏「滅亡の民」考　太宰治　第2号　洋々社　6-21頁　平成元年（1989年）
(16)　岸田　秀　太宰治論序説－精神分析的作家論－文芸読本太宰治　98-110頁　河出書房新社　昭和50年（1975年）
(17)　久保田芳太郎・無頼文学研究会　太宰治3　怒れる道化師　教育出版センター　昭和54年（1979年）
(18)　町沢静夫　自己愛性人格障害　駿河台　出版社平成21年（2009年）
(19)　三島由紀夫　太宰治氏のこと　三島由紀夫全集第30巻　新潮社　昭和50年（1975年）
(20)　中野嘉一　太宰治－主治医の記録－　文館出版昭和55年（1980年）
(21)　長野隆編　太宰治－その終戦を挟む思想の転位－双文社出版　平成11年（1999年）
(22)　長篠康一郎　太宰治武蔵野心中　広論社　昭和57年（1982）
(23)　西川直子　人間太宰治研究　弘前学院大学大学院社会福祉学研究科人間福祉専攻　平成21年度修士論文　平成22年（2010年）
(24)　長部日出雄　桜桃とキリスト－もう一つの太宰治伝－　文芸春秋　koutou　平成14年（2002年）
(25)　大原健士郎「心の病」、その神病理－あるがままの自分と仮面の自分－　講談社　平成8年(1996年)
(26)　小野正文　太宰治をどう読むか　サイマル出版会昭和46年（1971年）
(27)　太田治子　明るい方へ－父・太宰治と母太田静子－図書印刷　平成21年（2009年）
(28)　至文堂編　国文学　解釈と鑑賞　第48巻　第9号至文堂　昭和58年（1983年）
(29)　至文堂編　国文学　解釈と鑑賞　21世紀旗手太宰治　第66巻4号　平成13年（2001年）
(30)　島田明男・無頼文学研究会　太宰治　2仮面の辻音楽師　昭和53年（1978年）
(31)　相馬正一　評伝　太宰治　上・下　津軽書房　平成7年（1995年）
(32)　津島美知子　回想の太宰治　人文書院　昭和53年(1978年)
(33)　山崎富栄　雨の玉川心中　青い鳥双書　昭和52年(1977年)
(34)　山崎正純、浜村三春、山本哲士　太宰治　哲学的文学論　文化科学高等研究院出版局　平成21年(2009年)